

## 1 研究主題

読みの力が高まり、分かる喜びを味わえる国語科の学習指導の在り方

—単元を貫く言語活動の充実を図る指導と評価の工夫・改善を通して—

## 2 主題設定の理由

平成 23 年度完全実施の学習指導要領国語科では、基礎的・基本的な知識・技能をしつかりと定着させ、それらを活用して課題を探究することのできる国語力を身に付けさせることが求められた。国語科学習の本質は、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を育成することである。その能力を育成するために、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の 3 領域においては、言語活動が具体的に例示され、言語活動を通して指導事項を指導すると明記された。言語活動がこれまで以上に重視されたのは、言語の学びを通して、児童が自ら思考したり判断したり表現したりしながら、課題を解決する力を付けるためである。同時に単元の始めから単元の終わりに至るまで、児童が主体的に学習に取り組んでいくことが大切であるという考えから、「単元を貫く言語活動」を位置付けた国語科の授業が示されるようになった。

ところで、本学級で行った国語科学習に関する意識・実態調査（平成 25 年 4 月 25 日実施、第 6 学年 1 組 19 人）によると、明確な目的や見通しをもちながら主体的に学習に取り組んでいる児童が少ないことが分かった。特に「読むこと」の学習において、どんな力が身に付いたのかよく分からないと考えている児童が多いことも分かった。言語能力に対する児童の自己評価は全体的に低く、その一因として学びの主体性が不十分だったことが考えられる。また、自分自身の国語科の学習指導を振り返ってみると、教師が学習の進むべき方向を次々と示しながら授業を展開することが多く、児童自身がこの単元は〇〇に向かって学習している、この学習をすると〇〇の力が身に付くということを感じられないまま学習に取り組ませていたという反省が残る。学習の目的や見通しを児童と教師が共有して、国語科学習の本質に迫ることが課題として浮かび上がった。

以上のようなことから、国語科の学習指導において、児童が主体的に学習に取り組みながら読みの力を高め、分かる喜びを味わえるようにしたいと考えた。そのために、課題解決型の学習が可能となる単元を貫く言語活動に取り組み、その充実を図るための指導と評価の工夫・改善を通して、本主題に迫りたいと考えた。

## 3 研究のねらい

単元を貫く言語活動の充実を図るための工夫・改善を通して、児童の読みの力が高まり、分かる喜びを味わえる国語科の学習指導の在り方を究明する。

## 4 研究の仮説

国語科の授業実践において、単元の学習に対する意欲を喚起し見通しをもてるような導入の工夫、共通教材での指導内容の習得、習得した力を活用する場の設定等、指導と評価の工夫・改善をしながら、単元を貫く言語活動の充実を図っていけば、児童の読みの力が高まり、児童は分かる喜びを味わうことができるであろう。

## 5 研究の内容

### (1) 基本的な考え方

#### ① 「読みの力」が高まるとは

学習指導要領解説の国語編に明記されている「読むこと」の指導事項は、音読、効果的な読み、説明的な文章・文学的な文章の解釈、自分の考えの形成及び交流、目的に応じた読書である。第5学年及び第6学年の指導事項の中から、以下の3つの指導事項に焦点を当ててそれぞれの力を高めたいと考えた。

ア 文学的な文章の解釈→「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。」

イ 自分の考えの形成及び交流→「本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。」

ウ 目的に応じた読書→「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと。」

児童の「読みの力」が高まったかどうかについては、4月に実施した国語科学習に関する意識・実態調査結果と単元の学習後の同じ項目での調査結果の比較、ノートに記述された内容、授業時の見取り等から判断することにした。

#### ② 「分かる喜びを味わう」とは

何を学習するのか（課題）、何のために学習するのか（目的）、どのように学習するのか（方法）が分かり、課題に対して自分の考えを文章や音声などで表現することができ、自己の学びを認められたり称賛されたりしたとき、児童は達成感や充実感を感じ、分かる喜びを味わうことができるであろうと考えた。

#### ③ 「単元を貫く言語活動」とは

平成20年に公示された学習指導要領において、「各教科・領域等における言語活動の充実」が求められ、言語活動がより重視されるようになった。国語科の学習指導要領においては、「指導事項」のすぐ後に「言語活動」が置かれ、「(1)に示す事項（指導事項）については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。」ということが示された。つまり、「言語活動」を通して「指導事項」が求められることがらを身に付けさせると明言されたのである。さらに、「単元全体を通して、明確な課題意識をもち、その課題を解決していくための言語活動＝単元を貫く言語活動」を重視していくことで、学びの主体性を促し、児童は自ら進んで楽しく学んでいくことができる。児童は目的＝ゴールのイメージを、単元を通してもち続けることができ、教師にとっては、指導事項の確実な習得に向けて、児童の主体性を持続させながら学習を進めていくことが可能になるのが、「単元を貫く言語活動」である。

### (2) 主題に迫るために

#### ① 国語科学習に関する意識・実態調査とその考察

本学級の児童19名を対象に、4月下旬に国語科学習に関する意識・実態調査を行った。表1は、学習指導要領に示された言語活動例を参考に、「国語の学習で楽しいとき」を選択させた結果である。スピーチは苦手だが、話し合うことに対しては比較的多くの児童が楽しさを感じていることが分かった。その一方で感想や本の紹介文、手紙、記録文や報告文を書くことなどは、あまり楽しいとは感じていないこと

が分かった。いずれの項目でも選択数が少ないのは、経験の少なさ、目的をもって学習に取り組んでいなかった、達成感や満足感を感じられなかった等が考えられる。また、国語科の学習に目的や見通しをもって取り組んでいると答えた児童はわずか2名であった。

表2は「読むこと」の学習における内容事項から、しっかりとできることを選択させた結果である。いずれの項目でも自己評価が低く、特に文学的な文章の解釈に関するについてできていないと感じている児童が多い。自分の言語能力を肯定的にとらえたり、目的を明確にして学習に取り組んだりしていく必要があると考えられた。

表1 国語の学習で楽しいときと取り組み方

1 国語の学習で楽しいのはどんなときですか。(複数回答)	選択数
ア スピーチ	1人
イ 目的をもって聞く	1人
ウ 話し合う(交流)	11人
エ 手紙を書く	0人
オ 調べたことを文章にまとめる	7人
カ 記録文や報告文をまとめる	3人
キ 感想や紹介文・推薦文を書く	3人
ク 音読や朗読をする	7人
ケ 辞典や関連する本を読む・調べる	5人
2 国語の学習に目的や見通しをもって進んで取り組んでいる。	2人

(H25. 4. 25. 実施 6年1組 19人)

表2 「読むこと」の学習でしっかりとできること

質問事項(複数回答)	選択数
ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をする	6人
イ 本や文章を読んで読んでいるところやちがうところなどを比較	5人
ウ 文章の内容理解して、筆者(要旨)を捉え取り、自分の考えを	6人
エ 登場人物の関係や心算(巻)や会話(対話)を読み取る	3人
オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考	4人
カ 目的に応じて、複数の本や文章などを探したり選んだ	9人
キ 読みながら最も強く心に残ったところを見付け、ほか	5人
ク 資料や解説の文章などを活用して呼びかけや新聞など	6人
ケ その他どんな力が付いているかよく分からない。	9人

(H25. 4. 25 実施 6年1組 19人)

以上のような意識・実態調査の結果を受け、研究主題に迫るために、次のような工夫や改善が必要であると考えた。

② 研究主題に迫るための具体的な手立て

ア 主体的に学び課題を解決していく「単元を貫く言語活動」を位置付ける。

単元を貫く言語活動を位置付けることによって、単元を通して、児童は主体的に目的をもって学習に取り組むことができ、教師は指導事項を明確にしながらかその確実な習得に向けて学習を進めることができる。

イ 学習意欲を喚起し、単元の学習活動の見通しをもたせる導入の工夫

どのような力を身に付けるにしても、まずは学習に対する意欲をもつことが第一である。そして、国語科は、螺旋的・反復的な繰り返しの学習を基本とする教科であり、系統性を意識した指導が大切だと考える。導入では児童の学習意欲を喚起し、単元全体の見通しをもつことができるように、既習の学びを生かしながら、最終的にどのような活動をするのかを示すモデルや単元の学習計画表の提示等、視覚化を工夫する。

ウ 共通教材を活用した指導内容の習得の工夫

児童自身が習得した力を生かすことを意識しながら、共通教材を活用して、どのように読んだり表現したりすればよいかを学べるようにする。そのために、単元の目標

と関連付けたためあてとまとめが明確で学習の方法や流れをとらえやすい板書の構成に努める。また、学習の足跡が分かり、読みの不十分さに気付かせたり良さを認めたりする朱書きを添えたノート指導を行う。さらに、交流の時間を位置付け、考えを広げたり深めたりできるようにする。

#### エ 習得した力を活用する場の設定

「ポスターにまとめて紹介し合う。」「『読書案内』にまとめて紹介し合う。」「本の帯にまとめて紹介し合う。」など、学ぶための目的意識や相手意識を明確にし、習得した力を活用できるようにする。

#### オ 並行読書を位置付ける

単元の導入時に関連図書や自作資料を紹介し、図書環境を整えておく。朝読書の時間を有効に活用し、児童が目的に応じて本や文章などを選んで読めるようにする。

#### カ 目標に迫るための「パフォーマンス評価」の試み

評価の役割は、学習指導要領の目標に照らし合わせて実現状況を見たり、学習指導の在り方を見直したりすることであるが、授業中の見取りや客観テストだけでは不十分であると考えた。そこで、「パフォーマンス評価」を試みることにした。パフォーマンス評価とは「伝統的な客観テストで評価される学力の様相には限界があることへの反省から、学力を総合的に評価するために近年登場した評価法。観察や対話、自由記述、実技を含めて、パフォーマンス（表現活動や表現物）をもとに評価する方法。」（田中耕治編著 「パフォーマンス評価」）である。パフォーマンス評価のためには、リアルな文脈において、知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるパフォーマンス課題が必要となる。さらに、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなるループリック（評価指標）が必要となる。

既述したように、本研究では、導入、共通教材での指導内容の習得、習得した力を生かす場の設定、並行読書、パフォーマンス評価等の工夫・改善を取り入れた単元を貫く言語活動を通して、児童の読みの力が高まり、分かる喜びを味わえるようにする。

### (3) 授業実践

#### ① 事例1：第6学年 物語が強く語りかけてきたことを、ポスターにまとめて紹介し合うおうー「ばらの谷」ー

##### ア 授業の構想

本単元では、「ばらの谷」（東京書籍・小学6年）を共通教材として、「文学的な文章の解釈」「自分の考えの形成及び交流」「目的に応じた読書」の能力を育成するために、「物語が強く語りかけてきたことを、ポスターにまとめて紹介し合う」という言語活動を位置付けた。

第1次の導入では、既習の「注文の多い料理店」（東京書籍・小学5年）と単元の学習計画表を活用して学習意欲を喚起し、単元の学習の見通しをもたせる。

第2次では、共通教材「ばらの谷」の学習を通して、文学的な文章の解釈に苦手意識をもつ本学級の児童に対して、「人物の心情や場面の描写をとらえる」「優れた叙述について自分の考えをまとめる」とは、どのような手順でとらえ、どのようにまとめたらいかに具体的に指導する。そして、交流を通して、自分の考えを広げたり深めたりするこ

とができるようにする。

第3次では、第2次までの学習を生かす場を設定する。単元導入時から並行読書ができるように図書環境を整え、お気に入りの物語を探す。その物語が強く語りかけてきたことと理由をポスターにまとめて紹介し合うという活動である。これらの活動を通して、本単元で育成すべき能力の定着に努めたいと考えた。

#### イ 単元を貫く言語活動の充実を図るための指導と評価の工夫点

(ア) 導入での、挿し絵を活用した板書と単元の学習計画表の提示等、視覚化の工夫。

物語の内容や学習したことを文章のみから想起することが難しい児童もいる。そこで、既習教材「注文の多い料理店」の挿し絵を有効に使い、「設定」「展開」「山場」「結末」という物語の基本構成の言葉と結び付けながら板書を構成した。授業の終末では単元の学習計画表を提示して、学習意欲を喚起し、学習の見通しをもたせた。

#### 資料1 導入での視覚化を工夫した板書

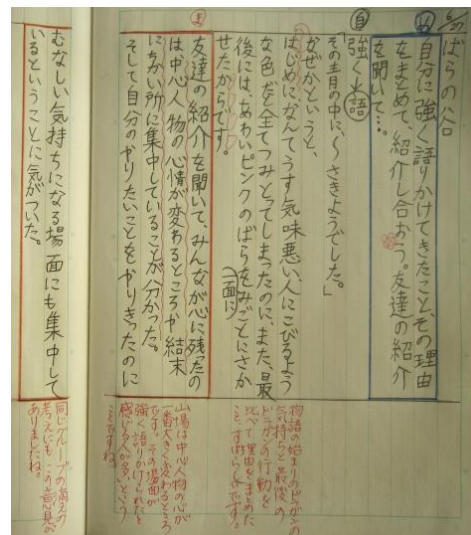


(イ) 共通教材で、指導事項を具体的に指導する工夫

ポスターには、登場人物の心情が大きく動いたところ、自分に強く語りかけてきた叙述や場面と絵、そこを選んだ理由、それに対する自分の考えをまとめる。そのために「ばらの谷」の第一場面で、黒板に掲示した拡大教材文を活用して、登場人物の心情をとらえるには、会話文や主語・述語に着目するという点を具体的に指導した。さらに、話型を示して理由の述べ方を指導し、自分の考えをまとめるときの書き出しと文末を提示し、例文を示した。第二場面以降は、自力で活動させ、机間指導で称賛や助言を繰り返した。また、資料2のように、めあてとまとめが明確なノート指導に努め、読みの不十分さに気付かせる、良さを認める、次時の活動のヒントになるような朱書きを添えるようにした。

授業の後半では、各自の考えを広げたり深めたりするために、まとめたものをペア→グループ→全体という流れで交流し合えるようにした。終末時では、「〇〇さんの発表を聞いて・・・ということが分かった。」という話型を示し、交流したことをもとに自分の考えをもてるようにした。

#### 資料2 児童のノート



(ウ) 学んだことを生かすための並行読書と発表会 **資料3 ポスターを基にした発表会**

共通教材で学んだ力を、並行読書で見つけた心に残った物語で生かす場面である。ここでは紹介し合うときに内容を共有し合えるように、教師が選んだ物語のシリーズに限定して並行読書を働きかけた。ポスターには、「ばらの谷」での学習を生かして、登場人物の心情が大きく動いたところ、強く語りかけてきた叙述や場面と絵、その場面を選んだ理由、それに対する自分の考えをまとめられるようにした。出来上がったポスターを基に資料3のように発表会を行い、感想を交流し合った。



ウ 授業の分析と考察

「文学的な文章の解釈」「自分の考えの形成及び交流」「目的に応じた読書」の3点から「読みの力」が高まったかどうかについて分析と考察を行う。

(ア) 第1次：導入時の板書の工夫と単元の学習計画表の提示

既習教材の挿し絵と物語の基本構成「設定」「展開」「山場」「結末」の言葉カードを結び付けた板書によって、ほとんどの児童が学習した内容を想起することができた。また、学習計画表の提示によって、単元の学習の見通しを立て、物語を読んで心に強く語りかけてきたことを上手にまとめて紹介したいと、ノートに記述した児童が19名中16名いたことから、2つの手立ては有効であったと考えられる。

(イ) 共通教材で、指導事項を具体的に指導する工夫

会話文や主語・述語に着目するという具体的な指導に努めた結果、ほとんどの児童が登場人物の心情をとらえることができるようになった。さらに、まとめ方の例文を提示し、書き出し・文末表現を統一したことで、全員が自分の心に強く語りかけてきた叙述や場面に対し、その叙述を選んだ理由、その叙述に対して自分がどう考えたのかを表現することができた。また、まとめたものを交流し合ったことで、読み取りの不十分さを補ったり各自の考えを広げたり深めたりすることができた。

(ウ) 学んだことを生かすための並行読書と発表会

単元の導入時から、図書環境を整え朝読書の時間と関連付けながら並行読書ができるように働きかけた結果、19名全員が「あらしのよるに」シリーズ8巻全てを読むに至った。そして、共通教材での学習と同じように、自分の心に強く語りかけてきた叙述、その理由、それに対する自分の考えを挿し絵と共にポスターにまとめ、紹介することができた。全員が読めるだけの十分な図書環境を整えたこと、児童にとって読みやすい内容の本であったことが、活発な読書につながったと考えられる。

(エ) 意識の変容

表3は「読むこと」についての4月と単元学習後の意識・実態調査結果を比較したものである。

表3 「読むこと」の学習でしっかりとできること

質 問 事 項 (複数回答)	4月	7月
ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。	6人	9人
イ 本や文章を読んで、似ているところやちがうところなどを比べること。	5人	10人
ウ 文章の内容を理解して、筆者の主張(要旨)を読み取り、自分の考えをもつこと。	6人	8人
エ 登場人物の関係や心情などを、文章の言葉や会話から読み取ること。	3人	15人
オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、考えを広げたり深めたりすること。	4人	12人
カ 目的に応じて、複数の本や文章などを探したり選んだりして読むこと。	9人	9人
キ 読みながら最も強く心に残ったことを見付け、他人に推薦する文章を書くこと。	5人	17人
ク 資料や解説の文章などを活用して呼びかけや新聞などをまとめること。	6人	6人
ケ その他(どんな力が付いているかよく分からない。)	9人	2人

(H25. 4. 25 H25. 7. 12 実施 6年1組 19人)

ほとんどの項目で意識が変容しているが、特に、本単元で習得させたかったエ、オの項目が向上していることから、児童の読みの力が高まり、分かる喜びを味わうことにつながったのではないかと考えられる。

(オ) 新たな課題

ポスターにまとめたものを紹介し合った時に、「次に同じような活動をする時、どれを参考にすればいいのだろう。」という感想があがった。ポスターにまとめることが「できた・できない」ということと同時に「どれくらいできたか」という視点が必要だという課題が浮かび上がった。また、活発な読書活動は行われたが、図書が限定的だったため、目的に応じて複数の本を選んで読むことができなかった。

② 事例2：第6学年 人物の生き方を考えながら読み「読書案内」にまとめて紹介し合う—「海のいのち」—

ア 授業の構想

本単元では、「海のいのち」(東京書籍・小学6年)を共通教材として、「文学的な文章の解釈」「自分の考えの形成及び交流」「目的に応じた読書」の能力をさらに高めるために、「人物の生き方を考えながら読み『読書案内』にまとめて紹介し合う」という言語活動を位置付けた。

既習の「ばらの谷」(東京書籍・小学6年)で、物語が強く語りかけてきたことを考えながら読むという学習をしている。その学習の成果と課題を生かしながら、この単元ではパフォーマンス評価法を試みることにした。単元の導入でパフォーマンス課題を提示し、ルーブリック(評価指標)を示す。さらに「読書案内」の大型モデルと単元の学習計画表の提示によって、学習意欲を喚起し、学習の見通しをもつことができるようにする。

第2次では、共通教材「海のいのち」の学習を通して、「読書案内」をまとめるために必要な登場人物の相互関係や物語の構成、人物の生き方のとらえ方、それに対する自分の考えのまとめ方を学ぶ。そしてまとめたものを交流し、自分の考えを広げたり深めたりする。

第3次では、並行読書を通して見付けた紹介したい人物の生き方について、第2次での学習を生かしながら「読書案内」にまとめて紹介し合う。これらの活動を通して、本単元で育成すべき能力をさらに高めたいと考えた。

イ 単元を貫く言語活動の充実を図るための指導と評価の工夫・改善点

(ア) 導入でのパフォーマンス課題、ルーブリック、大型モデル、単元の学習計画表の提示

資料4のようなパフォーマンス課題とルーブリックの提示によって、学習の目的を明確にし、一人一人の児童が自分に合った目標をもつことができるようにした。さらに「読書案内」の大型モデルと単元の学習計画表を提示することによって、学習意欲を喚起し、学習の見通しをもつことができるようにした。児童が視覚的に単元の学習について理解し、意欲をもてるように資料5のように板書を工夫した。

資料5 導入時の板書



資料4 パフォーマンス課題とルーブリック

「ばらの谷」では、「自分の心に強く語りかけてきたことや場面を紹介し合おう」という学習に挑戦。みなさんは「ばらの谷」で身に付けた力を使って「あらしのよるに」シリーズを読み、すばらしい紹介文をまとめることができました。〔国特指令1は見事達成〕

続く第2弾は「短歌に親しもう」・・・ここでは、かん賞文のまとめ方を学び、気に入った短歌を暗唱して、イメージ画・かん賞文付きのポスターをまとめ、紹介し合いました。すばらしいポスターをもとに、すばらしい紹介ができました。〔国特指令2もクリアー〕

さらに、秋をテーマに俳句を作り、かん賞文とイメージ画をそえた俳句カードをまとめ、子供句会を開くことに成功。6年1組俳句大賞は「山奥で 静かに散った 紅葉かな」でした。〔国特指令3も見事な出来栄でした。〕

次は、レベルが上がります。「あらしのよるに」シリーズでは、メイとガブという動物の物語を読んで、強く心に語りかけてきたことを、理由と共に紹介し合いました。今度の課題は「人物の生き方を考えながら作品を読み、“読書案内”にまとめて2組の友達に紹介しよう」という指令です。あなたが見た本の中の人物は、どのような人物で、どのような生き方をした人が「読書案内」にまとめて2組の友達に紹介してもらいます。

こんな本を読んで、登場人物の生き方についてこんなふうに考えたよと、自信をもって2組の友達に紹介できるような「読書案内」を作りましょう。「読書案内」には、登場人物、あらすじ(設定→展開→山場→結末の順でまとめる)そして、人間の生き方について分かったことや考えたことを工夫してまとめましょう。

レベル	心に強く響いたことを「読書案内」にまとめる
5 (A*)	① 登場人物の心情が分かるところから 心に強くひびいたことを見付けられた。 ② そこから分かることや考えたことを 人間の生き方と結び付けながら 自分なりの表現でまとめられた。
4 (A)	① 登場人物の心情が分かるところから 心に強くひびいたことを見付けられた。 ② その表現(文章や言葉)を使って 人間の生き方と結び付けながら 分かったことや考えたことをまとめられた。
3 (B*)	① 登場人物の心情が分かるところから 心に強くひびいたことを見付けられた。 ② 感想や人間の生き方と結び付けたことをまとめられた。
2 (B)	① 登場人物の心情が分かるところから 心に強くひびいたことを見付けられた。 ② ①に対して思ったことをまとめられた。
1 (C)	① 登場人物の気持ち分かるところに線を引くことができた。 ② ①に対して思ったことをまとめられた。

(イ) 共通教材で、指導事項を具体的に指導する工夫

「読書案内」を作成するためには、何をどのようにまとめるのか学ばなければならない。導入時に提示したモデルを活用しながら、教材文で登場人物の相互関係や物語の構成のとりえ方を学ばせた。さらに既習の「ばらの谷」の学習を生かし、人物の心情を読み取った上で、強く自分の心に語りかけてきたことから人物の生き方を考え、その生き方に対する自分の考えをまとめられるようにした。授業の後半では各自の考えを広げたり深めたりするための交流の時間を十分に確保することにした。

(ウ) 学んだことを生かすための並行読書と「読書案内」発表会

「読書案内」の最終ページは、自分が選んだ人物の生き方についてのまとめである。ここでは、事例1での反省から、朝読書の時間を「『読書案内』の最終ページで紹介する人物を見付けるための読書週間」として、目的に応じた本を選んで並行読書が行えるようにした。選んだ人物の生き方について「海のいのち」の学習と同じような手順でまとめ、紹介し合い、感想を交流し合うようにした。

ウ 授業の分析と考察

「文学的な文章の解釈」「自分の考えの形成及び交流」「目的に応じた読書」の3点から「読みの力」が高まったかどうかについて分析と考察を行う。

(ア) 導入でのパフォーマンス課題、ルーブリック、大型モデル、単元の学習計画表の提示  
パフォーマンス課題、ルーブリック、「読書案内」の大型モデル、単元の学習計画表を



提示した第1次，児童のノートには，「これから学習することがよく分かった」13名，「分かった」4名，「大体分かった」2名と記述されていた。そして，「いままでに勉強したことを生かして分かりやすく見やすい『読書案内』を作りたい。」等，19名全員が具体的な目標を掲げていた。

4つの手立てによって，学習の目的が明確になって学習の見通しをもつことができ，学習意欲を喚起することにつながったと言える。

(イ) 共通教材で，指導事項を具体的に指導する工夫

表紙，登場人物の相互関係や心情，物語の構成，人物の生き方とそれに対する自分の考え等，19名全員がまとめられたのは，既習「ばらの谷」の学び方を生かすことができたこと，「読書案内」のモデルが学習の手引きとなったことが考えられる。

(ウ) 学んだことを生かすための並行読書と「読書案内」発表会

並行読書数は平均2.8冊で，「読書案内」の最終ページには，「ダレンシャン」「南総里見八犬伝」「ずっこけ3人組」「千と千尋の神隠し」「五体不満足」等，様々な分野の本に登場する人物の生き方が，「海のいのち」の学習と同じようにまとめられていた。また，出来上がった「読書案内」を基に，各自が選んだ人物の生き方を紹介し合い，感想を交流したことは，考えを広げたり深めたりすることにつながった。19名全員が「読書案内」を完成させ，人物の生き方を紹介し合えたのは，パフォーマンス課題とループリックの提示によって，目的や方法が明確になり，導入時に湧き上がった学習意欲が単元の終末まで持続し，共通教材で学んだ力を活用させることができたためだと考えられる。

(エ) 意識の変容

単元学習後の「読むこと」についての意識・実態調査の結果を4月のものと比較してみると，エ，オ，カ，キの項目について，できるようになったと答えている児童が増え，児童は読みの力の高まりを実感していることが分かる。

(オ) 新たな課題

ループリックの提示によって，一人一人が到達目標を決めることはできたが，成功の度合いを示す5段階のレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述が明確だとは言えなかった。また，意識調査の結果を見ると，交流を通して自分の考えを広げたり深めたりすることができたと答えている児童が多いが，交流の観点は，自分と友達の考え方の類似や相違が中心で，深まりのある交流にはなっていなかった。何のためにどのように交流するのか，さらに明確にする必要がある。

③ 事例3：第6学年 戦争と人間の生き方をえがいた本を読んで，心に強くひびいたことを本の帯にまとめて紹介し合おう―「ヒロシマのうた」―

ア 授業の構想

本単元では，「ヒロシマのうた」（東京書籍・小学6年）を共通教材として，「文学的な文章の解釈」「自分の考えの形成及び交流」「目的に応じた読書」の能力を一層向上させるために，「表現の仕方に着目して書くこと。」と関連させながら，「戦争と人間の生き方をえがいた本を読んで，心に強くひびいたことを本の帯にまとめて紹介し合う」という言語活動を位置付けた。

既習の「ばらの谷」「海のいのち」での学習を生かしながら、新たに浮かび上がった課題—パフォーマンス課題とルーブリック（評価指標）・交流—について見直し、児童の読みの力がさらに高まり、分かる喜びを味わえるような単元にしたいと考えた。

そのために、第1次で提示するパフォーマンス課題、ルーブリック、本の帯の大型モデルの内容をより具体的にすることによって、一人一人の児童がより明確な到達目標を設定できるようにする。

第2次では、共通教材「ヒロシマのうた」で、3つの場面の課題を「この場面で本の帯をまとめるとしたら・・・」で統一し、既習の学びを生かしながら読むことと書くことを関連させた活動を行う。さらに目的や方法を明確にした交流を行う。

第3次では、並行読書を通して見つけた本の中から、自分の心に強く響いた場面や叙述を本の帯にまとめて紹介し合い、「この本を読みたい。」と思った本の帯ベスト3を決める。これらの活動を通して、本単元で身に付けさせたい能力を向上させたいと考えた。

## イ 単元を貫く言語活動の充実を図るための指導と評価の工夫点

### (ア) 導入でのパフォーマンス課題、ルーブリック、大型モデル、単元の学習計画表の提示

目的意識、相手意識が明確になり、学習の見通しがもてるようなパフォーマンス課題を提案した。児童一人一人が自己の到達点を決め、到達目標を達成するための手立てが分かるルーブリック、学習の到達点が視覚的にとらえられるような本の帯の大型モデルを提示し、活動内容と時間を意識できるように単元の学習計画表を活用した。

### 資料6 課題と評価指標を具体化した板書



### (イ) 共通教材で、指導事項を具体的に指導する工夫

ルーブリックを具体的に示した5段階の本の帯のモデルを学習の手引きとして活用しながら、場面ごとの本の帯をまとめさせることによって、指導事項を指導した。5段階の本の帯のモデルには、表現の工夫が視覚的にとらえられるようにしておき、同時に表現の工夫（体言止め、倒置法、余韻、呼びかけ、問いかけや投げかけ）に関する言葉カードを活用した。また、各自がまとめた本の帯を発表し合う場面では、交流の仕方の手引きを活用し、どこに着目して聞き、どのように自分の意見を述べればよいのか分かりやすくした。

### (ロ) 学んだことを生かすための並行読書と「わたしが選んだ本の帯ベスト3」発表会

並行読書を充実させるために、教科書で紹介されている関連図書を購入してもらい、さらに、図書館司書の協力を得て図書室にある関連図書をすべてそろえて図書環境を整えた。朝読書の時間を「心に残る本を見付けようタイム」とし、意欲的な読書活動が展開できる

ようにした。導入時に提案したパフォーマンス課題を常に意識させながら、「ヒロシマのうた」と各自が選んだ戦争と人間の生き方をえがいた本の両方で本の帯を作成し、互いに紹介し合いながら、「この本を読みたい！」と思った本の帯ベスト3を決定した。

#### ウ 授業の分析と考察

「文学的な文章の解釈」「自分の考えの形成及び交流」「目的に応じた読書」の3点から「読みの力」が高まったかどうかについて分析と考察を行う。

##### (ア) 導入でのパフォーマンス課題，ループリック，大型モデル，単元計画表の提示

パフォーマンス課題，学習の到達点が視覚的にとらえられるようなループリックを兼ねた本の帯の大型モデル，単元計画表を提示した結果，第1次の終末で児童がノートにまとめた記述は、「これから学習していくことがよく分かった」17名，「分かった」2名だった。さらに全員が「レベル4を目指して本の帯を作りたい。」等の具体的な到達目標をもつことができたことから，導入時の手立ては児童の学習意欲を喚起し，学習の見通しをもつことに有効であったと言える。

##### (イ) 共通教材で，指導事項を具体的に指導する工夫

ループリックを具体的に示した5段階の本の帯のモデルは，どのように文章を読み，どのように本の帯をまとめればよいのか学習の手引きとなり，児童は自分の目指す到達目標を目指して共通教材を読み，表現を工夫して19名全員が本の帯をまとめることができた。また，交流の仕方の手引きをもとに，自分の考えと友達の考えの比較や友達の表現の良さに気付く交流もできた。第2次の終末で児童がまとめたノートには，「目標としたレベルの本の帯をまとめることができた」18名，「友達の本の帯を読んで，自分が気付かなかったことに気付いた」等の記述が数多く書かれていた。

##### (ウ) 学んだことを生かすための並行読書と「6年1組本の帯ベスト3」発表会

朝読書の時間を有効に使って読んだ関連図書は，平均5.8冊となり，自分が紹介したい本と心に響いた叙述をもとに本の帯をまとめる活動では，1単位時間の中でほぼ全員が本の帯をまとめ，挿し絵も添えて清書し終えた。紹介したい本が決まってい，本の帯のまとめ方が分かっている，自分の目指す本の帯の形が明確だったためである。ノートのまとめには「ベスト3に入るような本の帯をまとめたい！」という内容の記述が数多く見られ，児童がまとめた本の帯は，各自が決めた到達目標を見事に達成していた。友達や先生方に読んでもらってベスト3を決めるという目的も，児童の学習意欲を高め，単元の導入で提示したパフォーマンス課題は，単元の最後まで有効であったと言える。ベスト3に選ばれた本の帯の作者が校長室で表彰されたことも児童の達成感をより高めることができた。

##### (エ) 意識の変容

表4は4月と3つの実践終了時にとらえた「読むこと」に関する児童の意識・実態調査の結果を比較したものである。ほとんどの項目で自己評価が高くなり，特に，エ，オ，カ，キの項目についてできると答えた児童が多かった。達成率が最も高い質問項目キは，ポスターや「読書案内」，本の帯など，学習した成果が形になって残り，その良さや違い等を互いに交流できたことが児童の満足感や達成感，そして，分かる喜びにつながったのではないかと考えられる。

表4 「読むこと」の学習でしっかりとできること

質問事項(複数回答)	4月	7月	10月	11月
ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。	6人	9人	10人	10人
イ 本や文章を読んで、似ているところやちがうところなどを比べること。	5人	10人	11人	11人
ウ 文章の内容を理解して、筆者の主張(要旨)を読み取り、自分の考えをもつこと。	6人	8人	10人	10人
エ 登場人物の関係や心情などを、文章の言葉や会話から読み取ること。	3人	15人	18人	18人
オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。	4人	12人	12人	14人
カ 目的に応じて、複数の本や文章などを探したり選んだりして読むこと。	9人	9人	17人	18人
キ 読みながら最も強く心に残ったところを見付け、ほかの人に推薦する文章を書くこと。	5人	17人	18人	19人
ク 資料や解説の文章などを活用して呼びかけや新聞などをまとめること。	6人	6人	6人	5人
ケ その他(どんな力が付いているかよく分からない。)	9人	2人	0人	0人

(H25. 4.25 / 7.12 / 10.25 / 11.22 実施 6年1組 19人)

## 6 研究のまとめ

単元を貫く言語活動の充実を図るための工夫・改善を通して、児童の読みの力が高まり、分かる喜びを味わえるような国語科の学習指導の在り方を究明してきた。研究を通して明らかになったことを、具体的な手立てに沿いながら述べる。

- (1) 単元を貫く言語活動を位置付けることによって、児童は目的意識をもって単元の始めから終わりに至るまで主体的に学ぶことができた。
- (2) 系統性を大切にしながら、モデルや単元の学習計画表、パフォーマンス課題やルーブリック等、視覚化を工夫し単元の導入で提示することによって、児童は学習意欲を高め、単元の学習に対する見通しをもつことができた。
- (3) 何のために学ぶのか、どんな力が付くのか、習得した力を活用する場を意識しながら共通教材で読み取り方や表現の仕方、交流の仕方を学んでいくことによって、読みの力を高めることができた。
- (4) 図書環境を整え読書の時間を確保し、習得した力を生かすための並行読書の働きかけは、目的に応じた読書の力を向上させた。

## 7 今後の課題

- (1) 「読むこと」に対する意識はほとんどの児童が向上し、文学的文章の読みの力は高まったが、質問項目ウ(説明的な文章の解釈)、ク(効果的な読み)の達成度に対する意識は極端に低い。説明的文章において、単元を貫く言語活動の充実を図ることができるような指導と評価の工夫・改善に努めたい。
- (2) 「話すこと・聞くこと」「書くこと」についての自己評価の意識は依然として低い。その原因や指導の在り方を継続して究明していきたい。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 小学校学習指導要領解説—国語編—(平成20年8月)
- 水戸部修治 授業&評価パーフェクトガイド 明治図書
- 樺山敏郎他編著 国語授業の新常識「読むこと」 明治図書
- 田中耕治編著 パフォーマンス評価 ぎょうせい